

お
ぼ
ん

悲しみが

「いのち」への

深いめざめとなっている

Sadness is our deeply
awakening to the depths of life.

真宗教団連合2026年法語カレンダーより



御同朋の社会をめざす運動(実践運動)
兵庫教区委員会

『偲ぶことによって、気づかされることがある』

浄土真宗では、お盆の法要を「歆喜会」ともいいます。なぜでしょうか？

阿弥陀さまは、いつでも、私が知っていても、知らなくても、気づいていても、気づかずにも、既にそれぞれの生命の上にはたらいでくださっています。

「そのままのあなたを、仏にすることの出来る阿弥陀になったから、どうか安心してまかせてください。南無阿弥陀仏」と、この口・身からこぼれでて、聞かせ続けてくださっているのです。「南無阿弥陀仏」のよび声に、いつも抱きとられている安心を恵まれます。

先立つて往かれた方も、残されている私も、同じ阿弥陀さまのおはたらきの内にあったのです。そのことをよろこばせていただく。ですから、わざわざ「歆喜会」という法要名にして、亡くなった方のためではなく、先立たれた方によって、私が気づかせていただくのです。

「偲ぶことによって、気づかされることがある」 父が口ぐせのようにつねに言っていた言葉です。

重い病気が進行して寝ていた父が、亡くなる少し前、孫と会話をしていました。

「じいじはな、もうすぐしたら、姿も形もなくなってしまう。でもな、阿弥陀さまがな、じいじのことを阿弥陀さまと同じはたらきのできる仏さまに生まれさせてくださるんじゃないから、いつでも一緒にいるからな。どこでも一緒にいるからな。どんな時でも一緒にいるからな。嫌になっても一緒にいるからな。」「うん、じいじ、そうやね。」

その場にいた皆が、阿弥陀さまのあったか〜い温もりに包まれているような、そんな時と空間でした。

じいじが先立つてからある日、孫がぼつりといいました。

「じいじがいなくなつて、やっぱりとても寂しい。じいじに会いたい…会いたい…。」「でも、南無阿弥陀仏っていうと、そのさびしさがす〜と消えるんや…。」

恋しくば 南無阿弥陀仏をとなうべし われも六字のうちにこそすめ

「南無阿弥陀仏」の六字の響きは、いのちの温もりいっぱいだなあと気づかせていただきます。



揖龍東組 西信寺 山口紫紀